わらびの栽培・加工をとおした地域文化伝承に関する研究活動

熊本県立芦北高等学校　食品製造班

1　研究の動機・目的

芦北町は、国指定史跡「佐敷城跡」や赤松館、芦北三十三観音など歴史や文化が現代にも根強く残っている町である。その中で佐敷諏訪神社では芦北町白木地区の山から採れたわらびから餅を作り、奉納するという伝統行事が約６００年続いている。この地域になくなてはならない行事ではあるが担い手の高齢化や重労働により、この伝統行事が少しずつ途切れようとしている。

そこで食品製造班では食品製造や専攻実習等で学んだことを活かし、地元のＮＰＯ法人「みさと」と連携し、わらびの加工品や栽培方法を研究し地域の伝統行事（文化）の伝承をめざした研究を実施した。

2　研究の概要

（1） わらび餅の奉納に関する歴史的背景の調査

（2） 地域の特産品としてのわらび餅の商品開発に関する研究

3　これまでの活動経過報告

（1）芦北町大野地区での歴史・文化に関するフィールドワークを実施

大野地区の観音像や神、地域住民から聞き取りを行い、６００年続くわらび餅奉納のルーツを辿った。

調査の結果、元々は相良藩の城主に献上していたわらび餅を飢饉の年に地域の神社にも奉納すると収まったことに由来。以降地域の人が伝統を守っている。しかし、調査を進めると高齢化により根堀作業の担い手が減少し、１０年前から奉納するわらび餅の量が極端に減っており、今後奉納を続けていくことが難しい状況であることが分かった。

（2）地域の特産品としてのわらび餅の商品開発に関する研究

大野地区のフィールドワークより私たちは大野地区で採れたわらび粉より加工品を開発し芦北町の特産品として販売することの出来る商品開発に取り組んだ。

原料のわらび粉は１１月に実施されたわらびの根堀作業に参加し調達した。地域の方からは「数十年ぶりに若い人たちが６００年続く伝統の根堀作業に参加してもらって嬉しい」との声も聞かれた。地域の人たちのわらびへの思い、伝統を守りたいという熱い思いを商品に込めることができるよう商品開発を進め地域の菓子店と連携しわらび餅を商品化した。４月に芦北町の佐敷諏訪神社で行われた例大祭で販売し用意した２００食を全て完売することができた。

芦北高とＮＰＯ 神社奉納を支援

伝統のわらび粉 伝えたか

餅を商品化 地域活性化も

4　今後の課題

（1）わらびの根堀作業の軽減化に関する研究及び休耕田を利用した栽培法の確立

（2）わらび栽培圃場の土壌分析

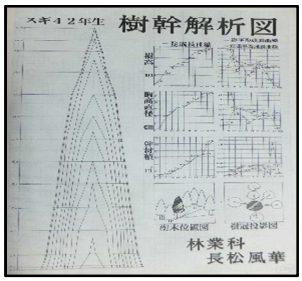
木育活動の実践　～森の未来、小さな手に託して～

熊本県立芦北高等学校　林業科　木育班

1　研究の目的

芦北高校林業科では、これまで森林や木材の良さに触れてもらうため、演習林で森林散策や物づくり体験の場を提供してきた。同時に、木材を利用することで森林が整備され、環境保全につながることも伝えてきた。このことが森のよき理解者を増やし、ひいては生活の中に木材を積極的に活用する人材の育成につながるのではないか、と仮定し研究活動を行っている。

2　研究の内容



(1)間伐材の利用率の検証

演習林のスギ、ヒノキを伐倒し樹幹解析を行った。

(2)端材の有効活用

端材を使った木工品の製作、販売、提供を行った。

(3)木育活動の実践

ア　各種イベントへの参加（木製ストラップ作り・オセロ対決）

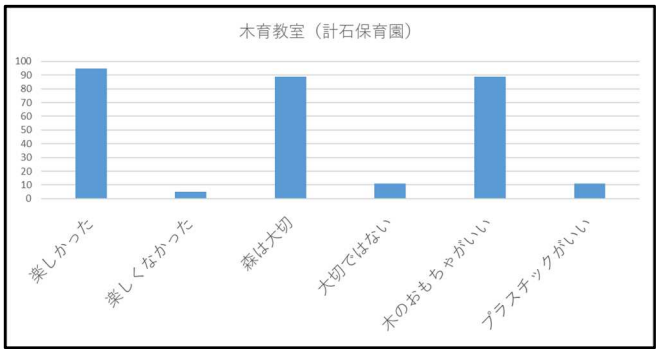
イ　木工教室（文化祭で低学年の小学生以下を対象に「円柱型木琴」の製作体験）

ウ　木育キャラバン in あしきた（ボランティアスタッフとして参加）

エ　幼児向けの木育教室（計石保育園で実施）

3　研究の成果

樹幹解析の結果、端材の活用意義が明確になった。その端材から実習製品としての収入が生まれたり、イベントでの木工品の材料の確保や地元福祉施設への提供につながったりと、有効活用が実現している。計石保育園で実施した木育教室のアンケートは良好な結果であった。特に保育士の方からのアンケートでは、園児たちから「また遊びたい！」という声がたくさん聞けたこと、身の回りの木で作られたものを探す子が出てきたこと、プラスチック製のおもちゃが多かったので木製の積み木を購入したこと、木育・森育活動は新しい保育指針（自然とふれあう体験を多く導入）に沿ったものであることなど、お褒めの言葉をいただくことができた。



「また遊びたい！」の声
木で作られたものを探す子
木製の積み木の購入
新しい保育指針との合致

4　今後の課題

丸太として価値の低い曲がり材から大型遊具を製作し、さらに木の魅力を表現していきたい。子どもの成長過程に応じた木育活動を検討し、本研究と芦北町のウッドスタート宣言等が発展できるよう、関連機関との連携も強化していきたい。